

特集

この腕で、 北本を耕す。



Kitamoto
farmer's spirit

私たちが生きていくうえで欠かせない「食」。普段食べているものについて、意識したことはありませんか？ どこでつくられているのか。新鮮で、安全なのか。どんな人が、どうしているのか。思いつくっているのか。「四里四方に病なし」「身土不二」という言葉のように、地元でとれたものを食べるのが一番体に良く、新鮮でおいしいのです。

市民が、市内の農家の人の生産物のおいしさを知り、農家はさらに自分がつくるものに誇りをもつ。両者の間に信頼関係が生まれること。それは、良いサイクルとなり、北本をさらに元気にするはずだ。

今年の2月の大雪で、北本市の農業も甚大な被害を受けました。再建には莫大な労力と費用がかかりました。しかし、北本市の生産者たちは前を向き、また一からつくりはじめています。

安全で、新鮮なものを市民に食べてもらうために。

今回の特集では、雪害にも負けず、私たちの命の源「食」を支える、北本市の頼もしい生産者をご紹介します。

【取材・撮影協力】
北本市農業青年会議所

若手8人 梨畑で座談会

北本の“農ビジョン”

を熱く語る
(暑く)

これからの北本市の農業を担う若手8人に
農業への抱負(=農ビジョン)を語っていただきました。



新井宏明さんの梨畑。
収穫を待つ梨に囲まれた
座談会となりました。



新井 啓佑さん
[新井農園：園芸]

平成26年に就農。
米、麦を中心に栽培。
枝豆やナスなど、畑栽培
にも力を入れている。
畑拡大が目標。



新井 剛さん
[新井農園：施設園芸]

平成13年に就農。
キュウリ、トマトを中心
にトウモロコシ等の野
菜を栽培。雪害に負
けず、現在再建中!



新井 宏明さん
[新井果樹園：果樹]

平成23年に就農。
主な生産物は梨、栗。
梨は6品種栽培してお
り、新品種への挑戦
も検討中。



伊藤 博之さん
[伊藤ファーム：園芸]

平成15年に就農。
消費者とのコミュニ
ケーションを大切に、
直売所をメインに露
地野菜を栽培。



大川 征男さん
[大川農園：施設園芸]

平成12年に就農。
ハウス栽培でのトマトと
水稲がメイン、その他
に季節野菜を栽培。
個人ブランド化が目標!

一からのスタート

——今年、新規就農者として、新井啓佑さん、伊藤博之さんが北本市農業青年会議所のメンバーとして加わりました。

新井(啓) ●今年の2月に就農したばかりで、年間のスケジュールを立てているところです。

やってみようという気持ちはありますが、今は荒川の河川敷に田んぼがあるので、米、麦を中心に。父が田、母と私が畑を担当していて、まだまだ手探り状態ですが、父に負けないように畑を頑張りたいですね。枝豆、ナス、ニンジン、秋口は柿がとれるかな……。そのうち市場にも出したいです。
伊藤 ●新井(啓)さんと同じで、家が農家だったので、いつかは継ぐと思っていました。小さいときか

らトラクターやコンバインに乗って手伝っていました。露地野菜、ハウス野菜、米などをつくっています。多品目で、一年中追いかけていますね。
スーパーにも卸していますが、直売所がメインです。消費者の方と直接話す機会を大切に、これからもやっていきたいです。

——スタートしたばかりといえば、長谷川修さんと新井剛さんは、2月の大雪で被害が大きかったそうですね。その後はどうですか。

長谷川 ●露地野菜をやっている、ニンジン、カブなどつくっていましたが、雪や雪解け水でだめになっちゃいましたね。ただ、被害から学び、ベット(畝)を高くして水はけを良くしたり、次に活かしています。
新井(剛) ●ハウスをやっています

こだわり

——長谷川さんは、黄色いニンジンをつくられたそうですね。

長谷川 ●普通のオレンジ色のニンジンと混ぜて売ったかったんだけど、時期がずれてしまっていて、売り上げは伸びなかったなあ。味は変わらないんだけど、見た目が変わったものは買ってもらえないのかも。でも、ネットで白いキュウリとかを見ると、作りたくなっちゃって。楽しいですよ。星型キュウリとかは、お弁当に人気でしたね。
渡辺 ●珍しいだけじゃ売れない。しかも、量もつからないと。

新井(宏) ●どうやって食べるのかなど、料理方法を提供したり、そこでしか買えないようなオリジナル性があればいいかも。
柳井 ●うちは、ネギの有機栽培に力を入れています。子どもがネギ嫌いだったんだけど、有機栽培だと食べる。味が出てくるのかなあ。
新井(剛) ●子どもは正直だからね。
柳井 ●ネギを食べていけば、インフルエンザにかからないのかもしれない。うちの子はかからなかったよ。
一同 ●それは言い過ぎでしょ!
(笑)

今後の抱負

——桜国屋がオープンして11年。一つの転換期を迎えていると思いますが、今後の農業についてや、それぞれの抱負を教えてください。

柳井 ●後継者不足はいつの時代も課題なので、農家に興味を持つ環境づくりをしていきたいなと思います。
新井(宏) ●新規で就農しようとしたら、場所の確保も重要かな。あとは、体験農場(※P7参照)は農業の一端に触れられるけど、小学生で終わってしまうから、せっかく興味を持ってもらっても職として意識するまではいかないのでは。
新井(剛) ●農家って、家単位で家族経営のイメージが強いけど、「農業」っていう形態にしていけないと。北本は若手も多いし、張り合いも、やりがいもある。今後は、メイン+αの、「+α」の部分強化していきたい。
渡辺 ●もともと米をつくっていたので、大学で施設のミニトマトを始めました。今後はすぐに結果は出

ないけど、露地野菜を軸に広げていき、消費者の皆さんにおいしく安全な野菜を届けていきたい。
大川 ●まずは、安定。そのうえで、個人のブランド化をめざしたい。今買いに来てくれるお客さんは、親父のお客さんだから。いつかは「大川征男」の野菜を買いたいっていつてもらえるように。ライバルが多いから、簡単にはいかないだろうけど。
新井(宏) ●泥だらけのイメージがあり、家を継がずに就職。父が亡くなり、いざ就農してみると、両親の大変さがわかって、同時にやりたいことが出てきて。梨、栗、すももをメインにやっています。が、まだまだ知らないことが多いです。仲間に教えてもらいながら、梨+αで、大きくしていきたい。



長谷川 修さん
[長谷川農園：施設園芸]

平成15年に就農。
黄色ニンジン、星型
キュウリなど、目で楽し
める野菜栽培に積極
的に取り組む。



柳井 勝吉さん
[柳井農園：園芸]

平成16年に就農。
有機栽培へこだわり、
子どもでもおいしく食
べられるネギなどを栽
培。



渡辺 友和さん
[渡辺農園：園芸]

平成15年に就農。
米をはじめ、小松菜、ほ
うれん草、大根、ニン
ジンなどの露地野菜
を栽培。

座談会を終えて

若き後継者でありながら、農業の今、そして今後のことをしっかりと見据えている皆さん。それぞれ栽培方法も生産物も違いますが、「自分たちが育てたものを食べてもらうのが一番の喜び」と思いは一つ。スーパーや直売所などで彼らの生産物を手にしたら、熱い思いを感じてもらえれば何よりです。

北本の「農」を支える 4人にインタビュー！

若き担い手を引っ張りながら
今の北本市の農業を支える4人にお話を伺いました。

虫が入りやすく、多くの
手間を要するトウモロコシ。
旬の味を楽しんでも
らうため、毎年栽培して
いる。大粒で、甘みがあ
るのが特徴。



内田農園の10代目で、
北本市農業青年会議所会
長の内田さん。レタス、キャ
ベツ、ブロッコリーなど
の露地野菜を中心に、県
が認証する特別栽培農産
物も栽培しています。
「農業に興味のある青年
と一緒に働きたいですね。
若い人が畑にいること
で、農業のイメージも変
わるのではないでしょ
うか」と、研修生の受け入
れも行っており、新規就
農をめざす若き後継者の

支援もしています。
こだわりは「天敵利用
害虫防除」という、でき
るだけ農薬を使わずに害
虫を防除する農法。将来
は経営者として農業を行
うことが目標です。
内田さんには、就農し
てから持ち続けている思
いがあります。農業にか
ける熱い思いが、この言
葉に込められています。
「生命あるものを扱う生
命産業の農業に誇りを
もって」



内田 泰宏さん
【内田農園 就農年：平成元年】

トマト、キュウリをメ
インに、その他にも米、
露地野菜(ブロッコリー、
キャベツ、ハクサイ、ニ
ンジン)を栽培していま
す。9月には、ナスや
ピーマンが採れるそう
です。有機栽培にこだわ
り、毎年同じトマトをつ
くるよう力を注いでいま
す。「天気、温度、土の状
態：常に環境は変わら
ず。毎年同じトマト、そ
れも、去年以上のトマト
をつくるのは、簡単そう
で簡単じゃないですよ」
子どものときから両親
の働く姿をみて、両親の
ようになりたいと思っ
ていたと話します。

「ハウスで仕事して、仕
事から帰ってきたら遊
んでくれて。仕事と家庭が
そばにあって、あたたか
い環境でした」
山本さん家族の手で大
切に育てられたトマト
は、市内だけではなく市
外にも評判が広がり、山
本さんのトマトを求め、
遠方から訪れるお客さん
も多いそうです。
「規模拡大や、加工場を
つくるのか：それより
は、「高品質」の現状維持。
うちに買いに来てくれる
お客さんのために、今年
も、来年も、常に最高の
野菜をつくるのが目標で
す」



ハリがあり、たっぷりと栄養が
詰まっているトマト。ほどよい
酸味と甘みで、市内外を問わ
ず買いに訪れる人が多い。



山本 浩之さん
【山本農園 就農年：平成7年】



吉田 幸夫さん
【花喜園 就農年：昭和62年】

吉田さんは、テッポウ
ユリ、フリージア、アマ
リリスなど、祖父の代
から栽培していた花に加
え、2年前から野菜の栽
培も始めました。小松菜、
ネギ、オクラ、ズッキー
ニなど、ハウスで栽培し
ています。現在は花の栽
培を休み、野菜の栽培を
どこまでできるのか、挑
戦中です。

ね。栽培のメインはネギ
にしようと思っていま
す。ネギもユリと同じ科
なので、得意科目かな
つて。」
後継者育成について伺
うと、「ユリについては
教えられるけど、野菜は
教えてもらう方が多いか
な。もっと、情報交換の
場が増えればいいです
ね。手が足りなくなっ
たときはみんなで補えるよ
うな、団結できる新しい
農業の形態もこれから必
要だと思います」
花も野菜も、将来はど
ちらも栽培できるオー
ラウンダーをめざしてい
ます。



花を育てた手がつくるからか、ズ
ッキーニもつやつやと美しい。同じハ
ウスで栽培するオクラの花も立派
に咲いており、「天ぷらにしたらさ
れいだし、おいしいかも」とのこと。



佐藤 篤史さん
【佐藤農園 就農年：平成14年】

麦、米、黒米、ウコン、
梅干し、プラム、ブルー
ベリー、プルーン、栗、
あんず…。
佐藤さんが生産する作
物は、体にいいと言われる
ものが多いです。その理由
は、佐藤さんが就農した
きっかけにありました。
「高校を卒業後、会社勤
めをしていましたが、体
調をくずして退職したの
です。そのとき、健康の
ための農業をやろう、と
決めました。黒米やウコ
ンは、健康を気遣う人の
ためにつくっています」
食べる人のことを考
え、安全性を重視。農薬
の使用を減らし、有機質

の肥料を使っています。
特に、ウコンと梅干しは
材料からつくり加工して
いるため、すべてが北本
産です。
後継者へのアドバイ
スを伺うと、
「農業というのは自分で
学ぶものです。一から教
えて、と言われても、つ
くる土地によっても向き
不向きがあるので一概に
教えることはできません
。最終的にはライバル
になりますし。それでも、
一生懸命やって、壁に当
たって、自分から学ぼう
とする人には、惜しみな
く助言するつもりです」
と語ってくれました。



食べる人のことを考えてつく
られたプラム。自然の甘みが口
に広がり、体も心も元気になる。

学校給食に 北本産の野菜が登場!



北本市の地産地消は、平成3年、給食センターの献立にキュウリとプラムを取り入れたのが始まりです。今では、桜国屋や生産者の協力も得て、年間十数種類の地場産物を取り扱うようになりました。

毎年11月には「北本ふるさと給食」として、生徒と一緒に食べ、野菜について話をする交流給食があります。次代を担う子どもたちが、学校給食を通じて地元食材に理解を深め、北本産野菜のおいしさや農家の人の思いを感じ、食に対する興味をより一層高めることを期待しています。



体験農場で子どもたちに 野菜を育てる楽しさを



市内8小学校全学年を対象に、「楽しい体験、豊かな収穫」を指導の方針として、体験農場の耕運などの管理や、野菜づくりのアドバイスを行っていただきます。ジャガイモやダイコンを、子どもが自ら種まきや植え付けをし、それを収穫して各

家庭で調理して食べます。ほとんどの野菜がスーパーや八百屋で買える今、自分で育てたものを食べる機会は貴重で、食に関心を持つきっかけにもなります。野菜を育てる体験、それを収穫して食べたときの味、子どもたちの喜ぶ顔を想像しながら、活動しています。



生徒は体験を通して、農作物のつくり方、収穫の喜びなど、机の上だけでは学べないことを学んでいます。

農作物づくりの他にも こんなこともやっています!

その他にも…

北本まつり(産業まつり)での地場野菜の販売・地場野菜を使ったとん汁の配布、桜国屋のイベントへの参加など、北本市の農業の発展のために活動しています。



市も農業をサポート!

「農業体験ファーム」を開設する農家に 助成を行っています。

農業体験ファームとは、農家が自ら開設し、農業経営として運営する農園です。市は、開設農家に施設整備費の一部を助成します。

詳しくはお問い合わせください。

問合せ 産業観光課 農政担当(☎594-5532)

次号の特集は「北本のまつり」を予定しています。